

日本人の家畜飼養と野生動物とのかかわり

市川健夫

-
- | | |
|------------------|---------------------|
| 1. 家族の一員としての家畜飼養 | 6. 沖縄における家畜観 |
| 2. 大家畜の飼育形態 | 7. 肉食の地域性 |
| 3. 婦人による馬飼育 | 8. 白峰と遠山郷における野生動物利用 |
| 4. 馬にまつわる民間信仰 | 9. 秋田県の山肉料理 |
| 5. 去勢をしなかった家畜 | 10. 家畜と野生動物との交流 |
-

論文要旨

日本人の家畜観といっても、仔畜を生産する農民と、育成する農民、使役する農民、さらに消費者である一般市民では、大きく異なっている。

仔畜を生産する農民は、家畜を家族の一員と考えて飼育してきた。したがって屠殺はおろか、体の一部を傷つける去勢さえ行なっていなかった。

牛馬の生産の多い農山村では、男たちは林業労働や出稼ぎに行く者が多かったので、牛馬の飼育は主として婦人や子供たちが当たってきた。

積雪が1m以下ならば、寒い北海道でも馬ならば年間を通じて放牧ができる。隠岐・対馬・粟島などにみられる牧畑でも、馬の年間放牧がなされている。

奄美・沖縄などの琉球ネシアでは、中国大陸と同じ家畜観をもち、自己の飼育していた家畜を屠殺して食べている。

牛馬、豚などの日本人の肉食は、地域性が大きい。それには古くからの馬文化圏、牛文化圏の存在が反映している。

マタギに代表される狩猟者は、肉食に対する抵抗感がなく、内臓や骨までも食べている。